（翻訳）イッポリト・ニエーヴォ『未来世紀に関する思弁的歴史』

橋本勝雄

解題

イッポリト・ニエーヴォ（Ippoito Nievo, 1831–1861）は、十九世紀半ば、イタリア統一運動（リソルジメント）の時代に活動した作家で、ガリバルディのシチリア遠征に参加した愛国者でもある。遺作となった『あるイタリア人の告白』（*Confessioni d'un italiano*, 1860）は未完成ながら、アレッサンドロ・マンゾーニの『いいなづけ』、ウーゴ・フォスコロの『ヤコポ・オルティスの最後の手紙』と並んで、イタリア近代小説の基礎となった。

今回ここに訳出した小説『未来世紀に関する思弁的歴史』（*Storia filosofica dei secoli futuri*）は、ニエーヴォが海難事故で没する前年の一八六〇年に、挿絵付の風刺雑誌『石の人間』（*L'Uomo di Pietra*）第四号に掲載された作品である。[1]

ニエーヴォの短編作品群はこれまであまり注目されていないが、本作品はそのなかでも、ジャンルと内容の点でひときわ目立っている。一八六〇年から二二二二年までの世界史を予想した未来政治小説であり、人造人間の発明がもたらす社会を描くディストピア小説として近代ＳＦ小説の先駆的作品である。

作中に、イタリア統一の達成からスエズ運河掘削、エジプトの植民地化、東西教皇の権力の衰退、フランス－プロシア戦争の勃発などが描かれ、当時のヨーロッパの政治状況をニエーヴォがどのように分析していたかが分かる。

さらに「オムンコロ」（人間もどき）と呼ばれるロボットの発明と快楽主義的な新興宗教の流布によって、世界が空腹と戦争から解放されるという理想的な未来を想定する一方で、労働から自由になった人々が倦怠と頭脳労働に消耗して麻薬の濫用と自殺が蔓延するという不安な皮肉を込めている。

作品を成立させている着想、つまり、促成栽培のように特殊なインクを塗った紙を四季の温度変化に何千回も曝すことによって未来の文章を浮き上がらせるというアイデアも興味深い。二〇〇〇年の時点であらゆる書籍を処分する命令が出されたという設定は、当時の禁止図書や有害文書の取り締まりに対する当てこすりだろう。

作品は以下のように構成されている。

序文
第一巻 ― チューリッヒの和からリュブリャナの和まで
第二巻 ― リュブリャナの和からワルシャワ連盟（一九六〇）まで
第三巻 ― ワルシャワ連合から農民革命（二〇三〇）まで
第四巻 ― オムンコロの発明と大量生産（二〇六六－二一四〇）
第五巻 ― 二一八〇年から二二二二年まで ― 無気力の時代
エピローグ

序文とエピローグの語り手は化学者であり哲学者のフェルディナンド・デ・ニコロージで、序文の「パレストロとソルフェリーノの戦いの年」とある表現から、一八五九年の設定と考えられる。

将来二二二二年にヴィンチェンツォ・ベルナルディ・ディ・ゴルゴンゾーラが記す五巻の歴史書を、一八五九年のデ・ニコロージが「実験」によって手に入れて書き写したという形式は、マンゾーニの『いいなづけ』にもある歴史小説の典型的な手法「発見された手稿」を時間的に逆転させたものとみることができる。（解題終り）

イッポリト・ニエーヴォ『未来世紀に関する思弁的歴史 ― 西暦二二二二年、世界の終末前夜までの歴史』

序文

類推の科学は、地球上ではアメリカ大陸の発見を、天空ではルヴェリエ[2]の惑星の発見をもたらした。それはダンスホールや芝居小屋で気取っている女たちに似ていて、男たちはみな、あれは美人ではないと言いながら、そういう女にすぐに惚れてしまうものだ。

プラトン以来永遠に若いまま、虹色の翼をはばたかせて、人智の究極の境界を飛び回っている類推の科学に対して、実験の科学は、ガリレオと同時代の愛煙家女性に似て、眼鏡を掛けていても郵便道路の敷石につまずく。それに値するものに栄誉あれ。

私が観察したところ、庭師は季節を人の手で進めることで、植物の開花を早めることができる。真冬に暖かい温室のなかで蕾みを開く薔薇は、まだ眠っている妹たちに向かって、寝ている彼女らにとっては未来の一年について薫りを通じて語り聞かせる。

このことを辛抱強く観察するのは並大抵の苦労ではなかった。パレストロとソルフェリーノで戦い[3]が起きているというのに、誰が薔薇のことなど気にかけるだろう。しかしさらにはるかに驚くべきは、私がそこから思いついた推論である。

つきつめてみれば、人間は植物に、そして植物は人間に似ている。宇宙が創造された時点で、そして創造に使われた物質の点で、人間も植物も我々はみな同類なのだ。人間の思考でも早咲きをさせられないだろうか。哲学と化学は無駄にこの世に生まれたのだと言い切れるのだろうか。

私はそのような戯言を信じたりしなかった。リービッヒ、シェリング、カリオストロ、ゴリーニ教授を調べあげた[4]。こうして着手したあの幸運な実験について語ることにしよう。

私が用意したのは半オンスの燐と一ドラムのプルトニウム、人間の根源となるふたつの元素である。これをしっかり混ぜ合わせて、知性の受動的媒介物と思われる微小粒子を適量取り出した。続いて、この秘密の原子を変質しない上等の黒インク一瓶に溶かしてから、動物磁気によって適切な意思と知性を与えておいた紙の上に垂らして、輝くような漆黒の大判の二頁を作った。ここからが、この大実験の微妙な仕掛けの始まりである。

私はその紙を、三百六十三回の冬と三百六十三回の夏に相当する平均気温に交互に集中して晒してみた。奇跡はきっちりと作用した。将来三世紀分の思考がそこに花開いた。その精密さには、ドイツ人批評家でも文句がつけられないであろう。

写真のネガを硝酸銀で洗ったときのように、真っ黒に見えた紙面に、最初はいくつかの白い記号が現れた。それからいくつかの文字が、頭文字から見えてきた。そして単語全体が描かれた。最終的に姿を現したのは、優雅な筆跡で記された物語である。それを私は筆写した。

こうして魔法を使って思考を盗んだ未来の脳髄の持ち主に対して、私はこのささやかな窃盗の許しを請いたい。その内容はほとんど喜べるものではなかったし、こうして私が無断で利用したことが、彼にとって役立ったのかもしれないからだ。

第一巻　チューリッヒの和からリュブリャナの和まで

二二二二年現在、神の恩寵により何事もなく幸せに生活しており、文章を書き記す行為は今では無意味な愚行として廃れてしまっているが、これまでの三世紀の歴史を私は書き残すことに決めた。その理由は、憂さ晴らしのため、そして曾孫が曾祖父よりも劣っていないと示すため、さらには今の私たちの生活が必ずしも至福ではないという意見を支持するためだ。

世界共和国の第二代総大司教は、素晴らしい良識を働かせて、二〇〇〇年以前の書籍をすべて破棄するという賢明な命令を下した。そのおかげで、どのようなスタイルを用いるか迷う必要がない。最も短いスタイル、すなわち真実のスタイルを用いることにしよう。

古文書に記された記録によれば、一八五九年ごろ、数人の男たちがチューリッヒの和を結んだという。ただし散会する前に、次の会議が予定されそこで未解決の問題を扱うことになったところを見ると、和平を結んだ彼ら自身もその和平に満足していなかったようだ。

実を言えば、私はそんな話をなかなか信じられない。しかし当時の事情は遥か昔の闇の中にあり、史料がまったく存在しない以上、広く伝えられている記録をそのまま信用するしかない。純粋な批判精神から、こうした伝承に感じる疑いを記すだけにとどめよう。

その人たちは、異なる判断をされるべきだと言いながら、争いに終止符を打つのをどうしてやめてしまったのだろう。会議で訂正を提案するために、そんな行動をしたのだろうか。それならさっさと

会議にかけるほうがよかったのではないか。あるいは当事者の手に議論を委ねればよかったのではないだろうか。

一度目と二度目の会議の違いは、最初は三人だけで議論していたのが、次には十人から十二人になっただけだ。訴えている二十人、三十人、一億人の人々に対して、三人が十二人になったとしても、判断の法的根拠、正当性はたいして増えもしなかっただろう。

私の推理は合理的である。こう考えると、チューリッヒでの事前交渉はひどく現実離れした話し合いに思える。しかし、はっきりとこのように伝えられている。我々の先達の敬うべき大失敗に異議を唱えないでおこう。[5]

そのころは、人々の熱狂が盛んに燃えさかり、「オムンコロ」、つまり機械仕掛けの人造人間がまだ発明されていなかった時代で、国家間の不和は、戦争と呼ばれる手っ取り早い手段で決着をつけられた。

戦争とは、人間の殺害を目標として生み出され、高められた技術であった。当時の人々は凶暴で邪悪だったため、この技術は全体としては文明に貢献した。ただ残念なことに、そのころの乱暴で邪悪な人たちもやはりこの同じ技術を使って、おとなしい善良な人々を虐げ、自分の利益を得ていた。

しかしまさに一八五九年、このおとなしい善良な人々が圧制者の行動から学んで、いわゆる「目には目を」とばかりにふさわしい仕返しをした。その後の数世紀に大きな意味を持つこの事件が起きたのは、イタリア北部だった。戦争という血なまぐさい実力行使がその後国際法によって否定されることになった理由については、世界が豊かになりオムンコロが増加した時代で詳しく取り上げることにしよう。

したがってそのチューリッヒの和平は達成されなかった。達成されたとしても全員が不満を抱く結果となり、新たな戦争がますます必要になった。

最初に戦争が始まったのは、イタリア人が自分たちの土地の主人となろうとし、過酷な税や人頭税、投獄さらには検閲で自分たちを苦しめるドイツ人たちをアルプスの彼方へ追放しようとしたからだった。検閲は、知性にはめられた口輪のようなものだったらしいが、どんな仕掛けだったのか今では想像もつかない。すぐ直後に起きた二度目の戦争は、最初の戦争で達成された見かけ倒しで書面上にすぎない成果を、現実に手にするものと思われた。

こうした意見は、現代では野蛮と思われるだろうが、当時は賞賛すべきものであり、イタリア人の良識を示すものであった。ところが、不運にもチューリッヒの和平のある条項によって妨げられていた。会議では、野獣に向かって棍棒を振り上げる前に、わざわざ道理を説いて聞かせることが定められていたのだ。せめて家畜であれば我慢もできよう！　しかし当時のイタリア人が相手にしていたのは、生粋の野獣であった。それでもイタリア人は多数派つまり列強の多数派の主張に応じた。三人の意見に続いて、今度は十二人の意見に耳を傾けたのだった。

たった一人だけが耳を傾けることを拒否した。他の人々の名は、

闇の中に忘れ去られたとしても、その名は闇から救われるべきだ。彼がガリバルディ将軍である。

ヨーロッパが「会議だ！　会議だ！」と叫ぶと、ガリバルディは「戦争だ！」と応えた。外交官たちが「ペンを！　紙を！　インクを！」とささやけば、彼は「銃を！　銃を！」と急きたてた。ガリバルディは無謀すぎるように見えたが、実は思慮深かった。もし彼の言う通りにしていたら、隷属と涙と恐怖の時代が数年短くなっていただろう。事実、会議では、席に座っておしゃべりし、議論し、判断するに任された。全員の意見が聞かれたが、決定の当事者であるイタリア人の意見だけは聞かれなかった。首脳会議では、今は信用を失った教皇と枢機卿たち、棍棒で殴られて国から追い出された国王や公爵たち、引退した警官や大臣たちが、自らの称号の権威を振りかざし、厳かに演説をぶった。庶民も演説をした。しかし庶民の苦労を半減させるだけで充分すぎると思われ、新しいヨーロッパの公法体制が完成した。

この体制はあまりにも残虐で愚かなものだったので、ここで簡単に記録しておくにふさわしい。私が思うに、不正確で皮肉屋の伝承のせいで、寄せ集められ補強された残骸に対してさらに何らかの不都合が加わったのだろう。そして、さらに馬鹿馬鹿しい矛盾した風変わりなもの、つまり彼らが言うところの「十五条約」がどのように伝えられているのか、私には分からない。

おそらく間違いか年代の混乱のせいだろう。この条約と、ここで私が語る条約は同一であるはずで、それについては、あやふやで胡散くさい、馬鹿げたものとしか見えなかった。だからといって、私は、この時代に、そして政界に、知恵と勇気のある人物たちがいなかったと言うつもりはない。しかしその当時の一年間を生き抜くことも学んでいなかったうえに、十九世紀の遺産の一部を十八世紀、十六世紀、さらに過去へ送りたいと願うごまかしのために、優秀な人々の考えは混乱し、意志はゆがめられていた。

記憶はよいものであるが、良識はそれよりはるかによいものである。記憶は、詩を作るうえでは驚くほど効果がある。しかし政治の世界においては人々が良識を手放さないことを私は願う。その必要があると納得させるには、あの不吉な会議の不可解で不幸な記憶を思い出せば充分であろう。

教皇は教皇、王、君主として残っただけではなく、教皇の三重冠ではあまりにも足りないと考えられ、さらに第四の小さな冠を受けることになった。もはや教皇の保護も課税も教理問答の教育も望まない気まぐれな人々に対して、はっきりしないあやしげな保護権を持つことになった。

ドイツ人はヴェネツィアを手に入れたが、その条件として、行儀よくふるまうこと、ドイツ人をひどい目に合わせるまで満足しないと誓った民族を満足させることが必要だった。何人かの公爵の領地が変わり、いくつかの古い組織は名前が変わった。ナポリ王と民衆は喜んでいるようにふるまおうと決心し、万歳を叫んでまた劇場通いを再開し、イタリアが解放されるものとのんきに信じた。

民衆は、木べらでポレンタを練る苦労なしに料理の完成を待ちた

い気持ちから会議を認めたものの[6]、結果として雑多な味のスープが出されると、昔ながらの習慣であり初めからの願望である暴動へと立ち戻り、ガリバルディをまた呼び寄せた。

ドイツ人たちは、この父にしてその子ありで、人のいいところをみせようと、ヴェローナやマントヴァに顔を出したが、そこにいたイタリア人は、その父親の父親とまったく同じだった。そして、その間にかなり増強された兵力でもって、支配層が混乱し弱体化したおかげで容易になった和平を利用して、熱心に、流れを食い止めようとした。

ナポリはもはやブルボン家ではなくナポリであり、ポー川に兵士七万人を派遣した。ピエモンテとロンバルディアはミンチョ川にすでに八万人を送っていて、トスカーナとロマーニャからは六万人が送られた。教皇と枢機卿たちは、終わらないコンクラーベのように、ローマに孤立し、教皇領の守備隊に守られているというよりも、慈悲深く忘れ去られていた。

フランスは何ができただろう。最初の勝利の名誉と成果を失わないためにも、二度目の勝利のための自分の役割を確保することだ。イタリアは、支配されている責任を逃れるために、ねぐらにいるオーストリア軍を包囲した。フランスは、良すぎる忠告を与えた責任を逃れるために、慌てて、オーストリア兵をねぐらから追い出すイタリアを助けた。そしてヴェローナ占領に続いてカステルフランコとポルデノーネの勝利に続き、リュブリャナの和平が結ばれた[7]。

ジュリオ二世[8]の言葉を借りればこの和平は「イタリアを蛮族から解放」したが、同時に、ジュリオ二世の後継者である教皇たちの横暴からも解放し、彼らの世俗権はローマとその周辺に制限されることになった。このリュブリャナの和によって、イタリア統一が始まり、二つの王国に分かれただけになった。その統一のためには、世俗に対する宗教権力が完全に衰退して、ローマがイタリア人の歴史的地理的首都に戻るのを待つだけのように見えた。

そして、この事件と同時に、ロシアはブルガリア占領を開始し、プロイセンはドイツで中央集権化を進め、スエズ地峡の掘削工事、フランスによるエジプトの植民地化が進行した。オーストリア帝国はガリツィア地方の一部を失ったことで、大きさの点ではなくとも、影響力の点では二級国に落ちぶれた[9]。

これらの出来事は、完璧にこの通りではないとしても、一八五九年に続く数年間、リュブリャナの講和条約の時期前後に起きたことである。その正確な年月日を述べることはできない。なぜならば、すでに述べたように、二〇〇〇年以前のすべてのものは、幸運にも天恵によって破棄されたために、細かな詮索をすることが不可能だからだ。

第二巻　リュブリャナの講和からワルシャワ連盟（一九六〇）まで

イタリアにグレゴリウス七世[10]時代を再現して半島を教皇の支配下に置き、ガリバルディとナポリ王をその仲間として、ガリバルディ

にはハンカチを、ナポリ王は煙草入れを教皇に差し出させようと考えた人々は、そのわずか数年後、リュブリャナの講和のあとでも再び裏切られることになった。

実際、ローマ聖庁の世俗の支配権は、ほんのわずかなものにしぼんでしまっていた。そして、ロシアの分裂派と英米の異端派がローマで宿代を払い骨董品を買い込んで教会のふところをうるおすことがなかったら、ローマの町から人影は絶え、住んでいるのはパスクィーノの石像[11]と教皇だけになっただろう。

幸か不幸か、弱腰のピウス九世[12]の後継者としてサン・ピエトロの教皇座に上ったのは、強硬派のプッリア出身者で、ヨハネス二十三世[13]を名乗り、ヨハネスの名の前任者たちにならって、きわめて積極的に聖務停止命令と破門を連発した。イタリア人たちも、教皇がそうした命令を出す機会をよろこんで提供した。私の見るかぎり、事態が急展開したのにはそうした理由もあったのだろう。

教皇の世俗権はほんのわずかなものになり、恐れる者はだれ一人いなかった。四千パオリの報酬をもらい緋と濃紫の服を着た枢機卿たちではイエズス会のプロパガンダの役にも立たなかった。亡霊のような力のない存在を、どうして激しく攻撃したのだろう。国内の聖職者たち、おべっか使いの外国人カトリックを敵視したのはなぜだろう。わずかで不安定な利益を手にするために、自らの平和を危険にさらしたのはどうしてだろう。とはいえ、そこには抵抗するだけの動機があったのだと私は思っている。

まず何よりも、教皇の世俗権はそれ自体が不条理であり、教皇の所有の大小にかかわらず、不条理なことには変わらない。しかも古くからの財をある程度保持していることは、ふたたび全体を手に入れる隠れた野心を残すもので、世俗権力に対抗し国家に損害を与える陰謀をイエズス会士たちの心に吹き込む。そればかりか、教皇がローマを占拠していることでイタリアの完全な統一は妨げられ、ミュラのナポリ王国[14]と北部イタリアのサヴォイア王国、このふたつの王国が合流できる唯一の中心地が排除されている。

そこでイタリア人は教皇領に反抗の声をあげた。外国人はこの状況をよく分からずに、イタリア人を罵っていた。忍耐を説く平和主義者がいなかったわけではない。しかし忍耐が美徳なのは、災難がよそにあるときである。

実際には、自由主義者のイタリア人から攻撃された教皇は、身を守るためにロシアの助けを求めた。そしてフランスは、すでにコスタンティノープルに手をかけていたこの北方の大国の強大な勢力を遠ざけるために、再度の介入を余儀なくされた。

そのような状況下で、フランス皇帝が没し、四か月間は合議政治が続いたが、国内に暴動の機運が高まり、革命が勃発した。ナポレオン五世[15]はドイツに逃亡して雪辱の機会を待った。オルレアン派と共和主義者たち、それにあの恰幅のよいシャンボール伯老[16]まで、権力の座をめぐって争った。

またもやパリで共和国宣言がなされたころ、教皇はアンツィオの港から英国のフリゲート艦に乗船していた。サン・ピエトロの小舟[17]はもはや比喩ではなく、現実のものとなった。東インド諸島は決定

的な独立を果たし、スエズ運河のおかげですべての民族が東方貿易の海路を利用できるようになり、アジア大陸中央でロシアが鉄鉱脈を発見して掘削を始めたことから、英国はかつての栄光を失い、宗教上の不和の火種を握ることで諸国に仕返しをしようと企んでいた。教皇がその軍隊とともに船上にとどまっていても、魚一匹、人ひとりの魂も釣り上げるわけもなく、混乱のなかで権力や金銭をつかむ役にも立たないと分かると、英国はロシアと密約を結んで、教皇とその十四人の枢機卿を、クリミア半島の岸辺に上陸させた。

当時のロシア皇帝であったニコライ二世は、コーカサスの勝利者であり農奴を解放した辛抱強いアレキサンドル二世とは似ても似つかなかった[18]。彼は、時間から仕事を取り上げ、長い幸運な王朝だけが達成できることを自分一代の間に独力でやってのけようと望むような人間であった。黒海と白海の凍り付く霧に頭をつっこみ、ボスポラス海峡の金色の砂に足を置き、片手を中国に、もう片手をイタリアに伸ばし、両世界と両ローマに君臨し、宇宙全体にコサックの印を押し付けることは、ピョートル大帝とニコライ一世の後継者として悪くないことであった[19]。

君主であり教皇であるふたりはタウリカの岸辺で顔を合わせた[20]。過去の家長であるヨハネス二十三世と、現在の支配者であるニコラウス二世は、一目で互いの意図を理解した。その後ふたりが交わしたことばは、とくに理由のない解説に過ぎなかった。

「教皇猊下、なにをお望みですか？」

「それは皇帝陛下、あなたのお望みになられていることと同じです」ラテンの偉大な司祭は答えた。

「つまり、どういうことでしょう？」

「つまり、私が望むのは世界の支配です。その権利は、我が聖なる先達の勅書によって保障されているのですから」

「その世界征服を、どこかの場所から手を付け始めるおつもりでしょうな」

「ローマから始めたい！　ローマに入り込んで無信仰と虚偽を祭り上げたあの背教者どもを、使徒の座であるローマから追い出したいのだ」

「よろしい。ローマを取り返すお手伝いをいたしましょう。ただし、はっきり決めておきたいのですが、私の世界は私の手に残しておきたいのです」

「陛下、改宗されるのでしたら、もし…」

「いや結構！　それは後ほど考えましょう。とりあえずセバストーポリの廃墟をお住まいとしてお使いください。私が費用を出しますから、そこでミサを行ってくださって結構です。その間に、わが国とイギリスの軍隊が、テヴェレ川の河口と永遠の都の城門を開けるでしょう。神があなたとともにあらんことを！」

「そして、陛下の軍隊に天の御加護がありますように！」

この日から、セバストーポリは第三のローマ、もしくは第二のアヴィニョンとなり、毎週日曜日に、西欧諸国の生活風俗に対する多数の破門状が発せられた。

その間、ロシア皇帝と英国がぐずぐずしていたわけではない。こ

の二か国は、教皇を口実にしてイタリアを侵略すると、そこで勢力を増してフランスの新体制を転覆し、当然ドイツを支配下に置くことで同意していた。ドイツはいつもロシアの従僕であり、前後から挟み撃ちにされて、抵抗しようなどと考えないだろう。そうなればロシア皇帝は全世界の皇帝となり、ローマの教皇はその家来のひとり、英国は衛兵となるだろう！

フランス国内の騒乱と、イタリアの二王国の嫉妬心のおかげで、この計画の前半は成功した。ローマ教皇領が復活し、侵略されたフランスがみずからオルレアン朝体制を廃止したことで、西洋諸国は北方の巨人の前にひざまずくかに見えた。ところがこの時、怠け者のドイツがその計算を狂わせたのである。

すでに長いあいだ、アルミニウス[21]の祖国では、眠りを誘う杉の木の下で、社会主義の情熱とサンシモン派が盛大に盛り上がっていた。ロシアの権力にまったく無抵抗な支配者層の下劣さに興奮し、十字軍騎士たちの愚かな腰抜けぶりに刺激されて、こうした情熱が爆発し、ビールとワインと熱狂で我を忘れたドイツのプロレタリアートの軍勢はアルプスとライン川を駆け下った。

この新しい洪水は二十年間続いた。そのあいだ、以前と同じままに残ったものは世界に何一つなかった。一世紀前にフランスで起きた革命にしても、この革命の小規模で貧弱な前置きに過ぎなかった。ハイネというドイツの詩人がこの革命を予想していたと噂されたが、そのために彼は祖国から追放され亡命の地で死んだという。

こうして一九二〇年ごろのヨーロッパには二つの大国、ドイツとロシアがあった。共和国ドイツと専制君主のロシアが向き合っていた。フランス、スペイン、イタリアは、いやいやながらロシアに蹴飛ばされて追随していた。特にイタリアは、規模が縮小し単なる聖職に堕していたとはいえ教皇領の存在のために、煩わしい思いをしていた。イギリスは一世紀前のオランダのように、黙って目の前の利益を追いかけて商売をしていた。アメリカは拍手を送っていたが、それが古いヨーロッパの産業の没落に対してなのか、それとも民主主義の大騒ぎに対してなのかはよくわからなかった。

そのとき、またボナパルト家の末裔の一人がフランスで立ち上がった。彼は軍事組織をふたたびまとめ上げて、危うい緊張をはらんだ二大大国の対立に割って入り、第三の勢力となってヨーロッパ同盟を結ぶ計画を可能とした。しかしその同盟が実現するにはそれから何年も待たなければならない。何よりロシアでの革命を待つ必要があった。

一九五〇年、ロシアで革命が起きた。この革命で、広大な帝国の体制が崩壊し、残ったトルコ人勢力はアラビア半島に追いやられ、東ヨーロッパにはビザンティン帝国、ポーランド王国、そして本来のロシア帝国が再建された。このロシア帝国は、前の時代にイギリスがインドを支配していたように、アジアの中央にアジア・ペルシア連邦を所有していた。

そこでフランスの呼びかけにしたがってワルシャワに集まったヨーロッパ諸国の代表が、国家連合を形成した。そこで十二の国家が新しく認められた。ロシア、ビザンティンの帝国、イギリス、

ポーランド、アイルランド、スカンジナビア、スペインの王国、フランス、ドイツ、スイス、ドナウの共和国である。

連合結成に先立って条約が締結された。諸国民に対する保障として、ロシアの三分割、イギリスからのアイルランドの独立、イタリア半島とスペイン半島の統一、教皇の世俗権の移譲、ドナウ流域の新共和国の独立（それにはマジャール人、セルビア人、ダルマティア人、ブルガリア人、ルーマニア人が含まれた）、そしてオーストリアとプロシアの解消、国際条約による世界平和条約と、ヨーロッパ議会が決められた。その議会は三年ごとに、ワルシャワ、ハンブルク、マルセイユ、ヴェネツィアで開かれることになった。

条約が結ばれたのは一九六〇年である。一九六一年にはアメリカで、北部大陸と、南部のスペイン領である大半島とのあいだに連邦が成立した。こうしてその時以降、未開拓地と中国は除いて、文明民族のこの二大連邦がよりよい社会の実現を目指して熱心に取り組むことになった。

第三巻　ワルシャワ連盟から農民革命（二〇三〇年）まで

その後しばらくして、ヨハネス・マイエルという名のボヘミアの農民が、自分は預言者であると宣言した。時が満ちたこと、その行いによって、黄金の世紀、つまり本当の千年紀が世界にもたらされるだろうと触れ回った。すでに社会は寛容になっていたので、この良き貸借人のおとぎ話を気にする者はいなかった。しかし彼の話はボヘミアの純真な人々の間で広まっていった。マイエルが説いた教義はきわめて素朴で陽気な道徳であったため、とくに抵抗を受けることなく、信奉者は数を増やし、熱心になっていった。

モラヴィア地方のある伯爵夫人が、生涯ずっと自分をしいたげてきた夫に対する仕返しとして、数百万にのぼる自分の遺産をマイエルに遺すことにした。するとマイエルは、自らの新しい領地を派手に飾り立てると、こうした財産は神のおぼしめしがあったからだと信奉者に説明し、自らを「善き人々の教皇」と名乗った。

ドイツ全土に信者があふれた。マイエルは四季の折々に盛大な食事会を開催した。ドイツ人の知性の支持を得るには、形而上学によって頭から下へごまかすより、胃袋から上へ向かって攻めたほうが簡単であると、まさに神の啓示によって見抜いたかのようだ。フィヒテは無視されたままだった。

ヘーゲルは四十年間の哲学研究で獲得した弟子はたったひとりで、それは自宅の守衛だった。マイエルは、二十八か月でひとつの民族全体を信者とした。プラハ、ドレスデン、ミュンヘンの麗しい令嬢と陽気な色男たちが信者に加わった。大人気の秘密はつまり、流行に乗ることにあった。「善き人々の教皇」はこの秘密をつかんでいた。

こうして「善き人」がますます増えていき、ドイツ政府は、彼の意図を探るほうがよいと考えた。たしかにどの政府もカール五世に似たところがあった[22]！　会議が開かれて、「善き人々の教皇」は、その教義を説明するようにと招かれた。

「あなたは何者ですか？」と代表者がたずねた。ドイツ人はその世紀でも、衒学趣味の祖国の伝統をそっくり残していたからだ。

「ボヘミアのヨーゼフシュタットのヨハネス・マイエルです。[23] 以前は農民でしたが、今は預言者で、善き人々の教皇です」

「どのような権利があって教皇となったのですか？」

「私の兄が靴職人となり、あなたが代表者になったのと同じです」

「なぜ預言者だと人々に思わせているのですか？」

「なぜって、私は預言者だからです！」

「あなたが預言者ですと！　どこにその証拠があるのですか？」

「私の知る限り、預言者は、よい知らせをもたらす人のことです。よい知らせをもたらしたのですから、私は預言者なのです」

「そのよい知らせとやらを伺いましょう！」

「私がもたらしたよい知らせとはこういうことです。人は生きるために生きるのですから、よく生きる必要があります。そしてよく生きるためには、気分よく、適度の仕事をし、他人に恩恵を与え、また恩恵を受けることです。これが私の信仰です。みんなを健康に、陽気に、満足にさせます。ただし怠け者と詐欺師は別ですが。世界はみんなのためにあります。金持ちが貧乏人をだますためにでっちあげた、肉体をいじめる賛美はやめなければなりません。世界にあるこの幸福を全員に分け与えるべきです。そうすれば、私たちはきっと幸福を味わえるでしょう。ほかのことは、神様が考えてくださる。みなさんに幸福あれ！」

会議の参加者たちは仰天した。代表者とその妻は、その日の夜に「善き人々の教皇」を訪ねて、信者に加わった。それ以降、マイエルの説く良識に従うことは屈辱ではなくなった。陽気な知らせの預言者は、都会の教養人たちからも大歓迎された。

ウィーンでは、シュヴァルツェンベルク家、リヒテンシュタイン家、メッテルニヒ家の末裔たちが、マイエルに戦いを挑んだ。[24] マイエルは、乾杯を祝してかれらを破門した。ライン川からドナウ川にまたがる哄笑の大波が、このゴート人の小人たちを飲み込んでしまった。

新しい結社はますます拡大していった。それはもはや宗教とは言えなかった。楽しく過ごすこと以外に、何の宗教的義務もなかったからだ。農業、商業、工業、蒸気機関、機械一般が素晴らしく発展を遂げ、生活にお金がかからなくなった。どの地域も活発に活動し、豊かで、陽気だった。ベランジェ[25]を大統領とする巨大な共和国を想像してみるといいだろう！

ローマ教皇は、もはやラツィオの王でもなくロマーニャ地方の総督でもなくなっていたが、それでもやはり教皇であり、マイエルの改革を歓迎したわけではなく、この奇妙な教義がどこへ向かうのかを探ろうと懸命だった。大勢のプロテスタント教徒、分裂派、ユダヤ教徒たちが新しい改革に巻き込まれたので、正統派であるカトリックにとって有利なのではないかと期待していた。しかし「善き人々の教皇」は、ローマ教皇の甘いことばに対する返答として、午餐会への招待状を送ったために、ふたりのやりとりはそこで止まっ

た。

そこで北国のもうひとりの教皇であるロシアが、マイエルにおびえはじめた。そして、あちらこちらで騒ぎが起きて、教皇たちや第三者の仕業で、ドイツに対する大きな戦争が持ち上がった。ロシアとしては、どんなことをしても、そんな明確で単純な、そして陽気な道徳を世界の人々が信じることは阻止しようとした。もしそんなことになれば、部下とするコザック兵やイエズス会士たちをどこでみつけてくることができるだろうか。そう懸念するのは当然だった。

「善き人々の教皇」ヨハネス・マイエルはすぐれた記憶の持ち主で、交渉をもちかけた。マイエルは、アジアとオーストラリアでの計画にロシアが邪魔をしないという条件つきで、ヨーロッパから出ていくのに二年間の猶予を手に入れた。その取り決めの通りになった。

マイエルは、シリアの国境へ、自分の信者数千人をライン地方とシャンパーニュ地方のブドウの苗木とともに送り出した。その土地で豊かな果実が実ったこと、作物が順調に生育したという知らせを受けると、マイエルは陽気な信徒の大集団を引き連れて、新しい国家で生活を始めた。

イエズス会は、アラブ諸民族やトルクネニスタン族の国で真の熱意もなしに始まったこの伝道活動は不安定だとあざ笑ってながめていた。ヨハネス・マイエルは笑って歌を歌いながら、アラル湖畔で絞られたライン川の葡萄酒は、原産地のものよりもおいしいと明言した。

近くで放浪生活をしていた原住民の部族は、新しくやってきた人々の楽しげな生活ぶりに興味をひかれた。適度に働き、穏やかにそして陽気に日々を送り、三日に一度の宴会を行う生活は、二年に一度、隊商を率いて昼夜苦労する暮らしよりもよいものだった。簡単に言えば、たいして説教する必要もなく彼らは改宗したのである。

原住民たちは洗礼を受けはしなかったが、定住して土地を耕すようになり、西欧の言葉を話し始めて文明化しつつあった。ヨーロッパからの移民が増えて、アジア人の改宗が多くなり、中央アジアの新しい連盟は強い新勢力となった。専制国家であるロシアの権力は、少なくともそのあたりでは弱められた。

その間ヨーロッパでは、優秀な市民からは見放され、ふたたび、独裁主義と宗教的陰謀の脅威にさらされて、あらたな騒動が起きつつあった。高慢さと怠惰がうわべだけの教育とともに、農村の平民にしだいに浸透していった。けちな紳士方のせいで教育は深く堅固なものとはならなかった。こうして決定的な危機が到来し、ラテン人種の生来の良識と三十年前にアジアに入植した「善き人々」の逆流を別にすれば、人類は没落していた。

中央アジアの「善良なる教皇」領では、アドルフ・クルがヨハネス・マイエルの後継者となった。クルは新しい都市バビロンを建設し、人類の首都と名付けた。帝国はまたたくまにアラブ世界から中国の国境へと広がり、拡大とともに産業、商業、鉄道と電信を広めた。各地方が産出する豊富な資源に支えられて、景気は一気に復活し、ムスリムのエネルギーは文明活動の一般的な方法といっしょに

なって、形を変えた。もはや中央アジアにはトルコ人もペルシア人もアフガン人もクルド人もなく、みな人間となったのである。

アドルフ・クルは、祖国を頑固で野蛮な革命に渡すまいとした。そのような革命は、地域の文明の種を一切根絶やしにしてしまっただろう。彼は社会諸階層間の秩序と調和を保つために、部下たちを派遣することを画策して、できれば社会階層をひとつにしようとした。新しい騒動の支持者が少なかったイタリア、スペイン、フランスからの援助を受けて、新文明の担い手は、六年間でドイツ、ドナウ川流域、ポーランドとスカンジナヴィアに平和をもたらした。

そして、このような奇跡がヨーロッパで成し遂げられて、現代社会の真の基盤が作られた一方で、アジアではロシアが中国の門戸を開いて、新しい加盟者三億人をヨーロッパの影響下においた。

二〇三〇年、アジア連合はシリアから東インド諸島、中国にかけての大陸の大半を含んでいた。多種多様な民族と言語と人種が、農業、工業、実践科学によってもたらされた豊かさを平等に享受していた。その年初めて鉄道によってストックホルムと北京、サンクトペテルブルクとカルカッタが結ばれた。

そのとき世界のすべての民族による会議が提案された。つまりヨーロッパ、アメリカ、アジアの三大連合による会議である。その会議はアドルフ・クルが議長を務めて、コスタンティノーポリで開催された。人類の幸福にかかわるあらゆる問題が取り決められた。

なによりも科学の問題が話し合われた。議長自身が長い演説で、多数の悪質な書籍のせいでこれまでの社会階層の相違と危険な革命が生じたことを示してみせ、全世界規模で書籍を破棄することを提案した。そのあとで賢人たちによる集団が、書籍から集めた知識で百科事典を作成する。そのことは人類にとって有益なものとなった。

その後も、いくつかのきわめて賢明な決議がなされた。アドルフ・クルが人類の偉大な長老であり、利益をもたらした人物であると宣言して会議は終了した。このときクルは八十歳で、三年後に亡くなった。彼の後継者として自由選挙により有名な経済学者サムエーレ・ダルネグロ・ディ・ピーサが選ばれた。

第四巻―オムンコロの発明と大量生産（二〇六六―二一四〇）

古代では、社会を支配していたのは偶然、つまり人間個々人の不規則な活動であった。新しい社会の発展は、漸進的で規則的であり、産業、すなわち人類の集団的で進歩的な活動によって支配される。ここで私たちは、これまでにない大きな変革を人間社会にもたらした科学革命に触れることになる。数十年もの恐ろしい混乱ののち、その変革は、社会を堅固な土台のうえに安定させ、現在もその安定を保ち続けている。

明快な言語の導入、家族の形成、航海技術の発見、農業、都市建設、宗教による道徳の法律化、人類平等の教義、火薬と印刷の発明、良心の自由の優位、蒸気機関と電力の応用、国家体制の確立、普遍的民主主義の合意、そして、幸福な生活の権利の社会的承認は、人類の姿を徐々に変えていき、もはや当初の姿とはまったく違ったも

のにした。

しかし、ここで語る変革は、その原因となったものの奇跡ぶりと、もたらした結果の大きさにおいて、人間の想像力を刺激したいかなる技術をもしのぐものである。

私がほのめかしているのが、「オムンコロ」あるいは中古人間、補助人間と呼ばれている発明であることはだれも承知だろう。その創造は、現在からせいぜい百六十年ほど前のことだが、すでにおとぎ話のような不確かさと暗闇に消えている。しかし確かな情報では、その功績はリバプールの機械工であり詩人のジョナサン・ジルであったとされている。

年代記作者によれば、以下のような話が伝えられている。

ジョナサン・ジルとセオドア・ベリダンは近所に住んでいた。ふたりとも縫製機械を作っていた。才能豊かで、貧しく、悪癖があり、嫉妬深い性格だった。相手の悪口を言い、機会があれば互いの書類や買い手、職業上の秘密を盗み出そうとして様子をうかがっていた。

あるときベリダンが人前に出てこなくなった。足しげく通っていた居酒屋に来なくなり、いつもの取引を放り出して、仕事場に姿を見せなくなった。家の階上から降りてくることはほとんどなく、夜遅くに鎧戸の隙間からよく明かりが漏れてきた。しかし見られていることに気がついて、用心深くその隙間を埋めた。そうなるとその家に人が住んでいることを示すのは時々聞こえるハンマーの音だけという状態が二日、三日と続いた。

ジョナサンは猜疑心に苛まれた。ベリダンはいったい何をしているのか？　どんな超自然な機械をこしらえようとしているのか？　それが気になってたまらず、どんなことをしてでも、好奇心を満足させようとした。

ある晩隣人の家の屋根に上ると、暖炉の煙突を慎重に伝わっておりていき、ストーブ囲いの後ろに隠れてそれにこつこつと穴を開け、秘密を暴こうと待ちかまえた。その煙突がベリダンの研究室の暖炉につながっていると知っていたのである。

しばらく待っていると、そいつがついに部屋に入ってきた。しかし、ジョナサンが驚いたことに、一人ではなかった！　付き添っていたのは、青白い痩せた小男で、手足をぎこちなく動かして、声の代わりにガチョウが鳴くような金切り声を上げた。その小男は、訓練を受ける兵士のように、機械工の前に直立した。

「座れ！」ジョナサンが叫ぶと、小男は座った。

「歩け！」すると小男は歩いた。

「書け！」すると小男は書き物机に向かって腰を下ろし、二つばかりことばを書きつけた。

「いつもそのことばじゃないか！　その二つのことば以外はないのか！」機械工は叫んだ。「継手のバネに従うのじゃなく、やろうとする作業に必要な動きをさせるには、どうしたらいいんだ？」

「どうすればいいかって？」ストーブ囲いに隠れてジョナサンは考えた。「こなす作業の違いと課題の意味を理解してそれにしたがって作業できるような、繊細なからくりとばね仕掛け、化学装置を作るのさ。そうか、自動人形を作ったのか…このちびは。三か月

か四か月したら分かるだろうよ！　この俺が人間を作りあげたとな！」

ジョナサンは膝をつっぱって屋根に戻ると、自宅へ帰って、「人間の雛型」ともいうべき自動人形を作り始めた。しかし組み立てては解体を繰り返し、さんざん知恵を絞って試行錯誤したものの、問題の自動人形はいっこうに完成しない。この哀れな製作者は、完成させる能力はあっても、始める能力が欠けていた。彼は、たしかに総合的な科学技術の点では最高の域に達していたが、機械工にふさわしい忍耐力がなかったのである！　三か月たってもやはり最初の段階にとどまっていた。自動人形は動かず、動いたとしても癲癇患者のような痙攣した動きだった。

ある日、哀れなジョナサンは、がっくりしてセオドアの家のドアを叩いた。きわめて大切な要件だと告げた。セオドアは家の中に迎え入れ、二人は暖炉の脇に向き合って座った。ジョナサンはさらに打ち明け話をする前に、奇跡的な仕事の達成のために共同作業が必要になった時は、ねたみも喧嘩もなしに仲良く、儲けを折半しようと隣人にもちかけた。ベリダンは承知して、耳を傾けた。

「ああ」相手は残念そうにつぶやいた。「人工人間の機械をほぼ自由自在に操って、決まった動きをさせる方法を見つけた！」

「見つけたのか？」にらみつけるベリダンの目には憎しみと熱望が満ちていた。

「そう、見つけたんだ」ジョナサンは大げさに付け加えた。「ただそれを実現するには、大切なものが足りない。俺は人間機械がない。三か月も苦労したが、どうしても作り上げられなかった」

「それだけでいいのか、ほかに足りないものは？」ベリダンは相手の首っ玉に抱きついて叫んだ。「人間機械なら、完成品がここにある！　見てくれ！」

そしてロッカーを開いて、ガチョウ声の自動機械を出して見せた。

「そうかそうか！」ジョナサンは意地悪く言った。「こうなったら、打ち明け話やお世辞の必要はない。俺たちの発明を組み合わせて、さっさと利用して大儲けしようじゃないか。この機械が十台あれば、俺たちはロスチャイルドなみに金持ちになれる」

このやりとりのあと、ジョナサンとセオドアは、セオドアの工房に隠れるように閉じこもって一緒に作業した。近所の人たちは二人が姿を見せなくなったことを噂して、二人ともおかしくなったのだと馬鹿にした。

しかし創造主の二人が、その息子、靴職人の技術を見事に習得した息子を世間に披露すると、その悪口はぴたりと止んだ。靴職人の仕事をするように作ったのは、動作の種類が少なくてすんだからだった。アダムと名付けられた奇妙な小男は、昼夜を通して飲み食いもせず作業を続けるという見事な勤勉ぶりで、靴と長靴、婦人用の短靴まで、大量に作り出した。

二人の技術者が仕事に追われていた間は、会社は順調だった。収入が増え、二人が一か月間で六体の靴職人を作り上げるようになると、ベリダンは居酒屋をはしごしてポーター[26]を何パイントも飲み干して、一週間あれば議会一の弁論家を準備することだってできると

大見得をきるようになった。

ジョナサンは、仲間のこうした奇妙な行動に頭を抱えた。ベリダンがその儲けの秘密を公に言いふらし、いろいろな面倒事を引き起こして、素晴らしい秘密を公開するはめになることを心配したのである。

ベリダンは、俺の事は俺が好きなようにやると反論した。ジョナサンが口をはさむと、ベリダンは、製造技術を他人に無償で教えて共同経営をだめにしてやると脅かした。ジョナサンは黙ったが、気難しく頑固だったので、自宅に引きこもると三日間姿を見せなかった。

みなさん、彼がその三日間に何の作業をしていたかご想像がつくだろうか？　彼はオムンコロを作り、同僚ベリダンのところに行ってその胸にナイフを二十回突き刺すように仕組んだのだ。

実際そのとおりになった。引き裂くような叫び声を聞きつけた近所の人が駆けつけてみると、哀れなベリダンは、ナイフで彼を穴だらけにした黄色い痩せた小男の腕に抱えられて、虫の息だった。光景がいっそう陰惨に見えたのは、犠牲者と死刑執行人のまわりでは、六人の靴職人が、その場で起きた犯罪にまるで気がつかないように、落ち着いて作業をしていたからだ。

小さな殺人犯を逮捕し、六人の靴職人を仕事場から遠ざけるのは大変だったが、どうにか裁判を行うことができた。法廷において事情が明らかになり、それはあり得ない奇跡に思えたが、ベリダン殺害において精神的な刑事責任があるかどうかが最後まで疑問に思われた。最終的に慎重な英国判事は、ジョナサン・ジルに対し、殺害を命じた教唆犯として死刑判決を言い渡した。そして機械仕掛けであるオムンコロも、計画殺人の実行犯として有罪となり、破壊されることになった。

ジョナサンは斬首されて秘密をあの世へ持っていく決心をし、あとに残されたのは六人の靴職人と、すでに有罪宣告を受けた小さな共犯者だけだったが、このとき銀行取締役員たち、企業家たち、王国上層部の人間が、これほど奇抜で社会の抜本的改革をもたらす技術がむなしく消えてしまうことを恐れて、国王に嘆願した。化学者、哲学者、経済学者、機械技師たちの委員会に製造上の秘密を明かすならば、犯人の命を救おうということになった。

ジョナサンは死ぬ決心をしていたが、よろこんで提案を受けいれたといえる。その時から、オムンコロ、つまり機械人間の製造は他の工業への産業投資と同じようになった。

しばらくすると、その製造工程はより容易で単純になった。オムンコロはさまざまな微妙で厳しい職業に適応できたので、一般に広く普及し、安い値段になった。またたく間にその数は実際の人間の人口を超え、現在でははるかに上回っている。そして部品の摩擦により物質的な消耗が起きるまで、きわめて長い時間働き続けているので、再生産のために必要な作業は、気晴らしかちょっとした運動をする程度であった。

社会経済上の変化とオムンコロの増産によって人類の状況は完全に変化を遂げ、描写するよりも想像するほうがたやすい。

社会の全階層が豊かさと怠惰を享受するようになると、農民は一時的優位な立場になった。彼らは、政治的な失敗を体験してまだ立ち直っておらず、他の階級に対して、無知で圧制者的な自分たちの数の多さを法の力で押し付けた。

しかし二二一〇年を過ぎたころから、この問題は解消された。そのころにはジルの世代から二世代が経過し、新成人たちは、教育と感情の面でかつてのような粗雑さはなく、文明人となっていたため階級間の相違はまったくなくなった。

ただ社会慣習として怠惰だけが広がった。その怠惰と同時にタバコ、アヘン、ベテルといった薬剤の服用が流行し、多数の市民が痴呆となって死んでいった。その不幸を避けるために学問に身を投じた者たちは、あっけなく頭脳を酷使して神経衰弱による突然死を迎えた。この病気について、医師たちは、二、三世代にわたって頭脳労働だけに集中したことが原因であるとした。

二一四〇年までは男性版オムンコロだけが生産されていたが、その年、ジョナサン・ジルの秘密を受け継いだ息子の一人が、女性版オムンコロ、いわゆるドンヌンコラの製造を始めたと噂された。経済学者たちはこの革新に大いに懸念を抱いた。それにより女性の特権が奪われて、人類の生殖不能をもたらすのではないかと思われたからだ。そのためジルの息子は、生涯のあいだ監視下に置かれて、危険極まりない発明を他に漏らさないようにされた。

そして彼が亡くなると、製造法の秘密が猫の肝臓にある酵母の一種だとされたので、全人類の第十回会議の議長となったグレゴリー・アリソンは、あらゆる種族の猫を駆除するよう命じた。命令は徹底的に実行に移され、女性の権利は救われた。しかし地球上は、我慢できないほどたくさんのネズミであふれかえることになった。

オムンコロに関する戦争、争い、そして宗教論争を語ると、あまりにも長くなるだろう。ただ付け加えておくと、ローマ教皇は二一八〇年にオムンコロを製造する人々全員を破門した。だがその禁令に効果がないのを見ると、ためらいながらもその被造物に洗礼を授けるように命じた。

彼らが何らかの意味で「生きている」のなら地獄落ちの責苦を避けるためであり、人間の活動の手段にすぎないとしても悪魔の手から救いだすためでもあった。

この二つの宗教令は、西暦五世紀から二十三世紀まで十八世紀に渡る歴代教皇の大勅令集の最後のものとなった。ただその前半、より長い部分は、二〇三〇年の書物破壊で消えてしまった。

最終第五巻　二一八〇年から二二二二年まで――無気力の時代

現在、人類は、過去の数世紀の偏見から解き放たれて、無駄で有害な知識のかたまりを捨て、平和と平等と世界繁栄を妨げていたあの肉体労働から解放されて、敵対勢力を持たない幸運な状態にあると思われる。

しかし残念ながら、人類の内面は損なわれており、不具合や悪癖なしには存在することはできない。すでに述べた神経衰弱や麻薬の

乱用を繰り返すまでもなく、黄熱病とコレラのあとに現れた疫病の発生を加えよう。それは全人類の生存に重大な打撃を与えかねないものだ。

その病気は医師によって「無気力のペスト」と名付けられた。実際、何世紀にもわたって肉体労働で苦労したあとで人間の身体組織が相対的な怠惰にさらされたことが原因らしい。この堕落した恐ろしい病気と気温の明らかな低下、退屈の漸進的増加とその結果としての自殺が、いまの私たちが直面している三つの危機である。

人類はいずれそのどれかに屈することになるだろう。私自身としては、この柔らかいベッドの上で死ぬ時間が残っていると信じている。自分が死んだあと世界がさらに危機を迎えるのか、それとも立ち直るのか揺れるのかは、私にとってはたいした問題ではない。

唯一の願いは、私の子孫が気遣ってくれて墓の上にスペインタバコを撒いてくれることだ。その匂いが大好きだからだ。それが私の遺言である。

二二二二年、私ヴィンチェンツォ・ベルナルディ・ディ・ゴルゴンゾーラは、この五巻の歴史書を私用のため楽しみとして記す。家長アドルフ・クルが二〇〇〇年以前の書籍すべてを破棄することを命じて以来一九八年後のことである。クルの魂が安らかに眠らんことを…

エピローグ

私はなんと言ってよいのか分からない。この退屈な長話、「未来世紀の歴史」を書き写して少々がっかりした。

とにかく我々の末裔ヴィンチェンツォ・ベルナルディ・ディ・ゴルゴンゾーラは二二二一年にこんなことを考え、書くことだろう。私は最初から最後まで丁寧にそれを書き写したのだ。

すべてこの通りになるのだろうか？　その面倒な判断は後世の人が下すだろう。いずれにしても、私たちは締めくくるにあたって、この本の著者と執筆が二二二二年である以上、二〇〇〇年以前の書籍に対して宣告される世界規模の処分を免れることを未来の家長アドロフ・クル陛下に願うだけだ。

その処分を免れれば、ヴィンチェンツォ・ベルナルディ氏の物語が最後の一行まで真実であるかどうか検証できるだろう。そして私はつけ加えよう。ヴィンチェンツォ・ベルナルディの魂に安らぎがあらんことを。そして彼が生まれるときに優れた助産婦の助けを得られるように。

哲学者にして化学者、フェルディナンド・デ・ニコロージ

注

（1）テキストはニエーヴォ財団（Fondazione Ippolito e Stanislao Nievo）のサイトよりダウンロードした。
（http://www.fondazionenievo.it/it/nievocast-03-storia-filosofica-

dei-secoli-futuri-di-ippolito-nievo-edizione-speciale/）二〇一五年八月二六日閲覧。二〇〇三年のサレルノ版とその注釈も参照した。Ippolito Nievo, *Storia filosofica dei secoli futuri (e altri scritti umoristici del 1860)*, Salerno, 2003.

（2）ユルバン・ジャン・ジョセフ・ル＝ヴェリエ（Urbain Jean Joseph Le Verrier）は海王星の存在を予言したフランスの天文学者。

（3）一八五九年の第二次イタリア独立戦争でサルデーニャ王国とフランス帝国の連合軍はオーストリア帝国に対し、五月三十一日にパレストラで、六月二四日にソルフェリーノで戦った。

（4）ドイツの化学者ユストゥス・フォン・リービッヒ男爵（Justus Freiherr von Liebig, 1803–1873）、ドイツの哲学者フリードリヒ・フォン・シェリング（Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, 1775–1854）、「カリオストロ伯爵」を自称した詐欺師ジュゼッペ・バルサモ（Giuseppe Balsamo, 1743–1795）、イタリアの科学者パオロ・ゴリーニ（Paolo Gorini, 1813–1881）を指す。

（5）サルデーニャ王国とフランスは、一八五八年七月二十一日に「プロンビエールの密約」、一八五九年一月に軍事同盟を結び、フランスが対オーストリア戦争の軍事援助を約束する。

（6）ポレンタは、トウモロコシの粉を練った北部料理で、鍋に入ったペーストを木べらを使って練り上げるのに力がいることから。

（7）リュブリャナ（Lubiana）はスロベニアの首都。

（8）ユリウス二世（一四四三－一五一三）。ローマ教皇として、イタリア半島における外国支配の影響を排除しようとした。

（9）ロシアはクリミア戦争（一八五三－一八五六）のあと、一八七六年のブルガリアの「四月蜂起」をきっかけに「バルカン解放」を唱えて、出兵し、一八七七年に露土戦争が始まる。

（10）グレゴリウス七世（一〇二〇－一〇八五）。ローマ教皇として教会改革を実行した。叙任権闘争で、神聖ローマ皇帝ハインリヒ四世を破門した「カノッサの屈辱」事件で知られる。

（11）ローマ市内のパスクィーノ広場にある石像。時代の権力者に対する批判、庶民の不満を表す張り紙で知られる。

（12）ピウス九世（一七九二－一八七八）。ローマ教皇として、一時はイタリア統一を支持したが、カトリック国オーストリアとの対立回避のために反動化した。一八七一年にローマがイタリア王国の首都となると、自らを「ローマの囚人」と宣言し、王国と対立した。

（13）架空の教皇。十五世紀にヨハネス二三世（一三七〇－一四一五）が存在するが、対立教皇であるため、一九五八年に教皇に選出されたジュゼッペ・ロンカッリはヨハネス二三世（一八八一－一九六三）を名乗った。

（14）ナポリ王国のジョアッキーノ一世（在位一八〇八－一八一五）君主となったナポレオンの義弟ジョアシャン・ミュラ（Joachim Murat, 1767–1815）。一八一五年にシチリア王国と合併して両シチリア王国となる。一八六〇年に侵攻したガリバルディがサルデーニャ国王ヴィットリオ・エマヌエーレ二世に占領地を献上、一八六一年にイタリア王国が誕生する。

（15）架空の皇帝。史実ではナポレオン・ヴィクトル・ボナパルト（Victor Napoléon, 1862–1926）が「ナポレオン五世」と呼ばれた。作品の書かれた一八五九年の時点では、フランスはナポレオン三世による第二帝政の時期である。

（16）シャンボール伯。アンリ・ダルトワ（Henri d'Artois, 1820–1883）。フランス王シャルル十世の孫で、ブルボン王朝支持者からは「アンリ五世」と呼ばれた。

（17）初代教皇であるピエトロが元漁師であったことから、「聖ピエトロの小舟」とはローマ教会を指す。

（18）一八五九年の執筆時点ではロマノフ家アレキサンドル二世（在位一八五五－一八八一）がロシア皇帝である。その後アレ

キサンドル三世（在位一八八一－一八九四）、最後の皇帝ニコライ二世（在位一八九四－一九一七）と続く。

(19) 初代ロシア皇帝のピョートル一世（在位一七二一－一七二五）と、露土戦争、クリミア戦争を起こしたニコライ一世（在位一八二五－一八五五）を指す。

(20) タウリカはクリミア半島の古い呼び名。

(21) アルミニウス（紀元前十六－二十一）は、帝政ローマ期初期のゲルマン民族の族長で、ローマによるゲルマニア征服を阻止した。

(22) 神聖ローマ帝国のカール五世（一五〇〇－一五五八）。

(23) 原文 Josefstadt はプラハのユダヤ人地区を指すドイツ語。ボヘミア出身の宗教改革で火刑に処せられたヤン・フス（Jan Hus, 1369–1415）が思い浮かぶ。

(24) オーストリアの政治家フェリックス・シュヴァルツェンベルク（Felix Prinz zu Schwarzenberg, 1800–1852）、リヒテンシュタイン公アロイス二世（在位一八三六－一八五八）、オーストリア宰相クレメンス・フォン・メッテルニヒ（Klemens von Metternich（一七七三－一八五九）らがニエーヴォの頭にあったと推定される。

(25) フランスの抒情詩人、シャンソン作家であるピエール＝ジャン・ド・ベランジェ（Pierre-Jean de Béranger, 1780–1857）を指す。

(26) ポーター（porter）は十八世紀に開発されたビール。

Ippolito Nievo, “Storia filosofica dei secoli futuri”

Katsuo HASHIMOTO

〈Sommario〉

Questa è la traduzione giapponese de *La storia filosofica dei secoli futuri* di Ippolito Nievo（1831–1861）. Di solito Nievo è ricordato come autore del romanzo storico *Confessioni d’un italiano*（1860）ma questo breve romanzo, uscito sulla rivista satirica “L’Uomo di Pietra” nel 1860, è un’opera fantapolitica in cui si descrivono le vicende della storia mondiale dal Risorgimento fino al 2222. È anche una fantascienza con l’invenzione degli uomini artificiali detti “omuncoli”. È inoltre interessante notare che il futuro che prevede Nievo si oscilla tra l’ottimismo razionalistico e il pessimismo.